

論説文等の文章理解に対する読解ストラテジーの影響

小宮修太郎

要 旨

ある種の読解ストラテジーの行使が、論説文等の読解における学習者による文章理解の差異にどのような影響を及ぼすかを見るために、2つの実験を行った。その結果、《①「文章の社会的目的を意識する」ことは、その種の文章の理解にプラスの影響を持つ。②「筆者の人物像を意識する」ことは、判断材料となる情報が十分でなければ、文章理解にプラスの影響を持たない。③「文章構成を意識する」ことは、他の読解ストラテジーとの併用によってのみ、プラスの影響を持つ。》ということを示すデータが得られた。

【キーワード】 読解ストラテジー 文章理解 文章構成 文章の社会的目的 筆者の人物像

On the Effects of Certain Reading Strategies upon Learners' Understanding of Text

Komiya, Shutaro

In this study, two experiments were carried out to investigate the effects of certain reading strategies upon learners' understanding of texts such as an editorial or an essay. The result indicates the following. 1) Being conscious of the social purpose of the text has a positive effect. 2) Being conscious of the writer's profile has no positive effect if the information about the person is insufficient. 3) Being conscious of the rhetorical structure of the text will have a positive effect only if combined with other strategies.

1. はじめに

論説文や評論文など、書き手の主張が表現される文章においては、主題や結論が明示的かつ一義的に示されている場合もあるが、そうでない場合もある。後者の場合は、学習者によって文章理解の差異が現れやすいものである。そうした文章理解の差異を生み出す要因の中には、読み手の学習者がどのような読解ストラテジーを行使しているかということも含まれていると思われる。

そこで、ある種の読解ストラテジーの行使が文章理解の差異に及ぼす影響を具体的に明らかにするために、2つの実験を構想し、実施してみた。実験の内容は、読み手の学習者に特定の読解ストラテジーの行使を促すような条件を与えた場合と、そうした条件を与えなかった場合とでは、文章理解の差異の分布にどのような違いが現れるかを測定するものである。そうした実験によって、2, 3の読解ストラテジーが実際に文章理解に及ぼした影響を見る中で、論説文の文章理解を助けるためにはどのような読解ストラテジーの行使が効果的であるか、また、どのような条件の下でそうなるかについて考察したいと思ったわけである。

実験の方法は、被験者となる学習者全体を平均的に同等の日本語読解能力を持つ4つのグループに分け、それぞれに読解ストラテジー行使の面で異なる方向性が生じるような4種類の条件を与える中で同じ文章を読ませ、結果としての文章理解の上でどのような差異が生じたかについてグループ間の比較を行うというものである。

実験の対象者は法政大学に在学中の外国人留学生48名であり、そのほとんどが東アジア諸国の出身者である。学年別では2年生38名、1年生10名であるが、日本語能力のレベルでは、全員が上級の学習者として分類できるとと思われる。

実験の実施においては、2年生にはA、B2つの実験を連続して行った。1年生に対しては、90分という制限時間内の処理能力の差を考慮してA実験のみを行った。

A実験というのは、ある新聞社説の文章を素材として、①文章構成を意識させること、②文章が持つ社会的目的を意識させること、の2つの条件が文章理解に及ぼした影響を測定するためのものである。文章理解の差異を見るために、ここでは「この文章の主題は何か」という問題に答えさせることにした。

B実験というのは、ある新聞企画記事の文章を素材として、①文章構成を意識させること、②筆者の人物像に注目させること、の2つの条件が文章理解に及ぼした影響を測定するためのものである。ここでは、筆者が読者に伝えたいと思っている中心的な内容(以下、これを簡単に「メッセージ」と呼ぶことにする。)を要約させて、文章理解の差異を見ることにした。具体的な実施方法などは、次節に述べるとおりである。

2. 実験の内容

2. 1 A実験の問題用紙の構成

この実験では、「男女産み分け法」に関する新聞社説を素材として用いた。

上記のことを測定するために、予備質問および本問の内容・構成を変えた4種類の問題用紙を作成し

た。その4種類は、①何も特別な条件は与えずに文章を読ませ、質問に答えさせるもの、②「文章構成を意識」させて、同じ文章を読ませ、その中で質問に答えさせるもの、③「文章の社会的目的を意識」させて、同様にさせるもの、④「文章構成と社会的目的の双方を意識」させて、同様にさせるもの、という意図、構成を持つものであった。

②の問題用紙の構成は以下のとおりである。

- [予備質問] 1. 新聞を読むとき、どんな記事を読むことが多いか。
2. 医学関係の記事ではどんな分野のことに関心があるか。

- [本問] 第1問: 1) 文章構成の型を3肢選択で選ばせる問題
2) その場合の文章の区切り目を示させる問題。

第2問: 文章の主題を4肢選択で選ばせる問題

一方、③の問題用紙の構成は以下のとおりである。

- [予備質問] 1. 新聞を読むとき、どんな記事を読むことが多いか。
2. 新聞社説というものは、何のためにあると思うか。その目的、役割を説明せよ。

[本問] 第1問: この社説はどんな状況のときに書かれたものか。

第2問: 文章の主題を4肢選択で選ばせる問題。

第3問: この社説の結論を80字以内で要約させる問題。

以上の中で、普通のアンダーラインの箇所は上記の条件を作り出すための質問、二重線の箇所は文章理解の結果を見るための問題であり、③にのみ第3問を入れたのは各グループの時間消費量のバランスをとるためであった。

④の問題用紙の構成は、予備質問が③と同じで、本問は、1.③の第1問、2.②の第1問、3.②の第2問という順番・内容のものである。

①の問題用紙の構成は、予備質問が②と同じで、本問は、1.③の第2問、2.③の第3問という順番・内容のものである。

2. 2 B実験の問題用紙の構成

この実験では、阪神大震災に関する企画記事の文章を素材として用いた。

上記のことを測定するために、ここでも4種類の問題用紙を作成した。その4種類は、①何も特別な条件は与えずに文章を読ませ、質問に答えさせるもの、②「文章構成を意識」させて、同じ文章を読ませ、その中で質問に答えさせるもの、③「筆者の人物像を意識」させて、同様にさせるもの、④「文章構成と筆者の人物像の双方を意識」させて、同様にさせるもの、という意図、構成を持つものであった。

②の問題用紙の構成は以下のとおりである。

- [予備質問] 1. (記事の前文を転記し、読ませた上で) 長い避難生活の中ではどんなことが避難民にとって大きな問題になるかを問うもの。

[本問] 第1問: 文章構成の型を3肢選択で選ばせる問題。

第2問：その場合の文章の区切り目を示させる問題。

第3問：「筆者が一番言いたいこと、読者に伝えたいと思っていること」を80字以内で要約または説明させるもの。

一方、③の問題用紙の構成は以下のとおりである。

[予備質問] 1. (記事の前文を転記し、読ませた上で) 筆者は、阪神大震災に関してどのような側面に関心を持っているかを問うもの。

[本問] 第1問：「筆者が一番言いたいこと、読者に伝えたいと思っていること」を80字以内で要約または説明させるもの。

第2問：(文章の流れがわかるように、という条件をつけて) 文章の内容を読書ノートにまとめさせるもの。

以上の中で、アンダーラインの箇所はA実験と同様の目的を持っている。

④の問題用紙の構成は、予備質問が③と同じで、本問は、②と同じものである。①の問題用紙の構成は、予備質問が②と同じで、本問は③と同じものである。

2. 3 実施方法

まず、被験者となる留学生を、日本語読解能力の面で平均的に同等と見なされる4つのグループに分けた。このグループ分けは、各クラス毎に、それぞれを人数面でも4等分するという形で行った。振り分けの基準となる読解能力のレベル分け、順位付けは、1年生は読解科目のクラスにおける平常点、2年生は同様の平常点と、前年度の読解科目の成績をもとに行った。そして問題用紙の種類の番号と対応させるために、第1グループから第4グループまでの番号をつけた。

実験の実施に当たっては、第1グループにはA、B両実験において常に①の問題用紙を与え、第2グループには②、第3グループには③、第4グループには④の問題用紙を与えるように配慮した。これは、同種の意図、構成を持った問題用紙に連続して取り組むことにより、読解ストラテジーの行使に方向性を与えるという意味での条件付けが一層強化されるだろうと考えたからである。制限時間は90分で、辞書は自由に使って良いことにした。

3. 素材となった文章の分析

3. 1 A実験の文章の主題と構成

この文章は、「『男女産み分け法』を考える」という見出しのついた社説であり、1986年6月16日の朝日新聞に掲載されたものである。当時、パーコール法という、最も精度の高い男女産み分け技術が完成に近付いたことが報道され、話題になっていた。そうした状況の中でこの社説は、男女産み分け法は遺伝病の予防への応用などの利点もあることを認めつつ、社会全体における男女の数のアンバランスをもたらす危険性があることを指摘して、実用化の前に社会的弊害を招くことなく応用できるためのルール作りが必要だと主張している。

したがって、この社説の主題は、「男女産み分け法の社会的危険性と、実用化のための条件」であると思われる。

その内容は、文章構成の面から見ると、以下のように整理できる。

I 序論（第1～第2段落）

第1段落：医学の発達は、自然の摂理への挑戦の歴史であったことを述べている。

第2段落：自然の摂理に逆らう新たな医学、「男女産み分け法」が完成に向かっていることを述べ、「この技術はこれまでの医学とどう違うのか。実用化するなら、どんな条件が必要なのか。」と主題を提示している。

II 本論（第3～第10段落）

第3,4段落：個人のレベルで見た場合のこの技術の利点と欠点を論じている。ここでは肯定的な評価をしている。

第5～10段落：社会のレベルで見た場合、男女の数のアンバランスが生じる危険性があることを指摘して、その問題の重大さや、現実化の可能性について論じている。

III 結論（第11～第12段落）

第11段落：筆者は、「学会などが、この技術が社会的弊害を招くことなく、第三者が十分納得できるケースにのみ応用できるためのルール作りを急ぐべきだ」と提言し、実用化はその後にするべきだと主張している。

第12段落：これまでの医学と違い、男女産み分け法は親のぜいたくな望みによるものであるから、そういう望みによって社会的弊害＝ツケを後代に残してはならないと結んでいる。

したがって、文章構成の型の分類によれば3段構成、文章の区切りは、[①第1～2段落、②第3～10段落、③第11～12段落]とするのが、最も適切な答えであると思われる。

3. 2 B 実験の文章の主題と構成

この文章は、阪神大震災後の救援態勢に見られる諸問題について、野田正彰氏が執筆したシリーズの第1部をなすもので、「救援 野田正彰の目 1」という見出しがついていた。氏は、近年各地の災害救援に関する調査に取り組む中で「災害救援文化」の形成の問題を考えた精神医学者である。「阪神」に関して述べたこの文章の中で、野田氏は、①大震災直後の被災者たちの行動に、「受け身の被災者」ではない新しい動きを感じたこと、②にもかかわらず、その後の救援態勢に見られる諸問題によって多くの場合は避難民が自立性を失い、「受け身の被災者」になっていること、③その諸問題とは何か、を書いている。全体的に見て、この文章の主題は「被災者の自立」という視点から見た阪神大震災直後の市民の動きと、その後の救援態勢の問題点」であると思われる。

文章構成の面から見ると、大きく前半(上記の①を内容とする)と後半(上記の②と③を内容とする)に

分かれており、さらに具体的には以下のような展開になっている。

I. 前半＝大震災直後の市民の動きと、筆者の評価。

第1段落：筆者は、「地震の翌日訪れた西宮で阪神の被災者たちを見て、これまでの被災地とは全く違う印象を受けた」と述べる。

第2, 3段落：筆者は、西宮駅で見た避難民の姿、言葉を描写した上で、彼らが単なる群衆ではなく、理性的に判断し、自発的に行動する個人の集合だったと評価する。

第4段落：筆者は、この時点では、阪神地域の被災と復興の中で新たな災害救援の文化が作られるのではないかと予感したが、その後の展開で、この印象が変わりつつあることを述べる。

II. 後半＝阪神地域の救援態勢の視察の中で筆者が感じたこと、および提言したいこと。

第5段落：筆者は7日目から各避難所を訪問する中で、各避難所の雰囲気の違いを感じたことと、それが地区の特性、職員の判断力などの諸要因によるものでもあると観察したことを述べる。

第6, 7段落：筆者は、被災者たちの中で自発的に仕事分担の動きがあった避難所の様子を述べ、評価する一方、施設の長および職員の運営能力、対応の仕方によって避難民が無気力化したり、活動的になったりするという差が生じていることを指摘する。

第8, 9段落：筆者は、収容場所の規模（体育館中心か、教室との併用か）も避難民の精神的安定と自立性に大きな影響を持ち、体育館での避難生活の中では避難民が疲れ果て、受け身の「被災者」になりがちであることを指摘する。

第10段落：筆者は、被災者が精神的ゆとりを持てる居住環境と、短時間でも家族の相談に使える小部屋の提供に努力すべきだと提言する。

以上のような文章展開であることから見て、文章構成の型としては「2段構成」、文章の区切り方は、「1～4段落、5～10段落」とするのが最も適切な答であると思われる。

4. A実験の結果と分析

4. 1 主題把握問題の解答分布状況

A実験では、被験者の文章理解の結果を見るために、4グループ全部に共通して主題把握の問題を課したわけであるが、その選択肢は次のようなものであった。なお、問題用紙の中では、社説の見出しは削除しておいた。

問題：この社説の主題は何か。最も適当なものを選び、○をつけなさい。

- a. 男女産み分け法の利点と欠点
- b. 医学の発達が人間社会に与える影響
- c. 自然の摂理という視点から見た男女産み分け法の社会的危険性
- d. 男女産み分け法の社会的危険性とそれを防ぐための条件

実験の結果としての解答分布状況を見る前に、各選択肢がそれぞれの被験者の文章理解の特徴を把握の上でどのような意味を持つかを簡単に解説しておこう。

この4つの選択肢のうちでは、dが最もリアルにこの社説の目的、意図を理解した上で文章の主題を把握したことを示すものと言えよう。というのは、産み分け法をめぐる当時の状況と文章全体の展開を考え合わせると、筆者はその状況の下で「産み分け技術の社会的弊害の危険性」を指摘するとともに、何よりも「実用化のルール作りを急ぐべきだ」と訴えたかったのだと思われるからである。その意味で、cもある程度は社説の目的を反映しているが、具体的提言につながる面を見落としたものと言える。一方、aとbは、この時点でこの社説を書いた筆者の意図を理解していないか、または、取り違えたことを示すものである。両方とも、当時の社会的状況と結び付けて文章の主題を判断するという意識の欠落を感じさせる答である。

さて、この問題に対する被験者全体の解答分布状況、およびグループ毎の解答分布状況を集計してみると、表1のようになった。

表1 主題把握問題の解答分布状況

	a 選択者数	b 選択者数	c 選択者数	d 選択者数	総人数
第1グループ	1	3	5	4	13
第2グループ	2	6	2	1	11
第3グループ	0	3	3	6	12
第4グループ	1	3	5	3	12
被験者全体	4	15	15	14	48

4. 2 グループ間の分布状況の比較

表1の集計結果をもとに、各グループの解答分布状況を比較してみよう。その場合、この実験の目的は「与えられた条件の差異が、文章理解にどのような影響を及ぼしたか」を見ることであるから、何も特別な条件は与えなかった第1グループの分布状況を比較の対象として、これと他のグループの分布状況を個別に比較していくべきことになる。

1) 《第1グループ対第2グループ》の比較

まず、比較の原点となる第1グループの分布状況であるが、ここではcとdの選択者数がやや多く、bの選択者数はやや少ない。しかし、a以外は、b,c,dにだいたい三分された形になっている。

これと比べて、第2グループの分布状況を見ると、bに人数が集中しており、第1グループと際立った差異が見られる。選択者毎に比較すると、cおよびdは、第2グループのほうがずっと少ない。これに対して、bは第2グループの数が第1グループの数の2倍になっている。

2) 《第1グループ対第3グループ》

第3グループでは、dを選択した者の数が目立って多い。選択肢毎の比較では、bの人数は第1グループと同じで、cの人数は第1グループよりやや少なく、dの人数はその分多くなっている。

3) 《第1グループ対第4グループ》の比較

第4グループの分布状況を見ると、aからdに至るまで、第1グループの数とほとんど変わらないことがわかる。つまり、第4グループと第1グループとでは、与えられた条件の差異にも関わらず、主題把握問題に関する限り、全く同様な解答分布状況が見られたということである。

4. 3 結果の考察

ここでは、以上の結果分析を中心的なデータとして用いつつ、他のデータも参照することによって、3つの主要な点について考察していくことにする。

4. 3. 1 「文章の社会的目的を意識させること」の影響

表1の分析で見たように、第3グループでは、主題把握の解答分布状況でd選択者への人数の集中が見られた。これは、予備質問や第1問で与えた条件が、被験者の文章の読み方に影響を及ぼした結果であると言える。つまり、この文章の場合は「社説というものの役割、目的」を考えさせたり、「当時の状況」を考えさせたりするような形で「この文章の社会的目的を意識」させることが、文章の主題を適確に把握させることにプラスの効果を持ったと言えるわけである。

このことは、第3グループの被験者たちの予備質問および第1問に対する解答結果の集計と照らし合わせることによっても確認できる。すなわち、これらの質問に対しては比較的多くの被験者がほぼ適切な解答をしているのであるが、両方の質問に適切に答えた被験者の中ではd選択者の割合がきわめて高いという集計結果が出ているので、こういう被験者の場合はこれらの質問が主題把握問題を考える手がかりとして役立っているのが感じられるからである。

まず、予備質問「社説というものの目的、役割は何か」に対する第3グループの被験者の解答を分類・整理してみると、次のようになる。

[予備質問への解答要旨の種類と、その人数]	
aタイプ：ある問題について新聞社の主張を示し、世論を形成する。……………	2人
bタイプ：ある問題について新聞社の意見をアピール(または論説)する。……………	4人
cタイプ：ある問題について論説し、人々に考えさせる。……………	2人
dタイプ：ある出来事(や問題)について読者に説明して、よく理解させる。……………	3人

次に第1問「この社説はどんな状況の時に書かれたものか」に対する同グループの解答を分類整理してみると、以下ようになる。

[第1問への解答要旨の種類と、その人数]	
aタイプ：男女産み分け法が完成に向かい、この技術の応用について 論議が起きているとき ……………	3人
bタイプ：男女産み分け法が完成に近づいたというニュースが出たとき ……………	4人
cタイプ：男女産み分け法の応用について、倫理に違反するかどうか論争がある (または、ルール作りが主張されている)とき ……………	2人
dタイプ：新しい医学技術が成功して、社会的に影響を与える場合、その他 ……………	2人

さらに、以上2つの質問への解答のし方と、主題の捉え方の間にどんな関連があるかを見るために、表2を作成してみた。2つの質問への解答のし方については、単純化して示すために、aからdまでの種類毎に3段階の点数評価に置き換えた。その場合、予備質問・第1問ともに、aタイプが最も正確な答と見て[+2点]、bとcは部分的に当たっているという意味で[+1点]、dタイプは不適切な答と見て[-1点]という評価にした。

表2 第3グループ被験者の予備質問、第1問への解答状況と主題選択の関係

	予備質問	第1問	解答者数	a選択者	b選択者	c選択者	d選択者
解 答 状 況	+2	+2	1	0	0	0	1
	+2	+1	1	0	0	0	1
	+1	+2	2	0	0	0	2
	+1	+1	2	0	0	2	0
	不明	+1	1	0	0	0	1
	+1	-1	2	0	1	0	1
	-1	+1	2	0	1	1	0
	-1	-1	1	0	1	0	0
第3グループ合計			12	0	3	3	6

(※表の見方の例：2つの質問に[+2+2]の人が1名いて、そのうちd選択者が1名いる。他は0。)

表2を見ると、2つの質問の両方にプラス評価の解答をしている被験者の中ではd選択者の占める割合が圧倒的に大きいことがわかる。逆に2つの質問の両方またはいずれか1つにマイナス評価の解答をしている被験者の中ではb選択者の割合が大きい。c選択者の分布状況は、d選択者とb選択者の分布状況の中間的な様相を示している。このように、予備質問等に適切な答ができたかどうかは、その後の主題把握の仕方にも関連していることがわかる。

ということで、第3グループの主題把握の解答分布状況についての考察をまとめると、次のようになる。予備質問と第1問で「文章の社会的目的を意識させる」条件付けを行ったことは、このグループの中の多くの被験者に、社説の書かれた背景や目的をよりリアルに把えさせる効果を持つことになり、その結果として主題を適確に把える者の増加にもつながった。しかしながら、「社説の目的」とか「背景となる状況」について誤った理解を示した被験者の場合は、上記の条件付けも所期の効果を持たなかったため、誤った主題把握をする傾向が見られた。

4. 3. 2 「文章構成を意識させること」の影響

表1の分析で見たように、第2グループでは、主題把握の解答分布でもb選択者への人数の集中が見られた。選択肢bは、文章の主題を医学発達の歴史総体に関するものと見る把え方を示すもので、実際の主題から最も離れたものである。したがって、この結果から言えることは、この文章の場合は、「文章構成の型」および「区切り方」を考えさせるような形で「文章構成を意識」させることは、文章の主題を適確に把握させる上で逆効果となったということである。

ここでは、関連するデータを参照しながら、①どうして「文章構成を意識させること」が適確な主題把握につながらなかったのか、②とくにb選択者が多くなったのは、どうしてか、という2つの問題を考察してみる。

①の方から具体的に考察していくために、まず、第2グループの第1問の(2)、「文章の区切り方を示せ」に対する解答を集計してみると、表3のようになった。

表3を見ると、このグループの中でも、文章の区切り方は多様に分かれていることがわかる。その中でb選択者の集団に注目してみると、集団全体に共通する特徴というものはないが、結論部分の区切り方に、ある傾向が見られることに気が付く。それは、b選択者の半数が、第12段落だけを結論部分とする区切り方をしていることである。この区切り方は他の集団には全く見られないものなので、この傾向はb集団の特徴として把えられる。

この「第12段落だけを結論部分とする区切り方」がbという主題選択と結び付くのは当然のことだと言える。というのは、先に3節で示したように、結論部分の中でも第11段落は産み分け法問題についての実質的な結論が述べられているのに対して、第12段落は「医学の発達は自然の摂理への挑戦の歴史」という視点に立って、修辭的目的による「結び」の言葉が述べられている部分だからである。この「結び」の言葉を文章全体の結論と見なした場合、文章の主題も「医学の発達」に関するものと見えてくるのは当然の結果だと言える。

表3 第2グループの各被験者の「文章の区切り方」

主題選択別 被験者番号	文章構成 の解答	文章の区切り方
a選択者1	3段	1・2/3・4/5・6・7・8/9・10/11・12
〳 2	4段	1・2/3・4・5・6・7/8・9・10/11・12
b選択者1	2段	1・2/3・4・5・6・7・8・9・10・11・12
〳 2	2段	1・2/3・4・5・6・7・8・9・10・11・12
〳 3	3段	1・2/3・4・5・6・7・8・9・10・11/12
〳 4	4段	1/2・3・4/5・6・7・8・9・10・11/12
〳 5	4段	1・2/3・4・5・6・7/8・9・10・11/12
〳 6	4段	1・2/3・4/5・6・7・8/9・10・11・12
c選択者1	4段	1・2/3・4/5・6・7・8/9・10・11・12
〳 2	4段	1・2/3・4・5・6/7・8・9・10/11・12
d選択者1	2段	1・2/3・4・5・6・7・8・9・10・11・12

結論部分だけを見ても上記のことが言えるが、文章全体の構成に目を向けると、さらにそうした誤認を生み出しやすい形になっていることがわかる。つまり、修辭的目的を持った部分は、結論部分の他に序論部分にもあり、しかも文章の最初と最後に置かれているということである。このように「冒頭」と「結び」が呼応した修辭的構造になっているため、これらを「序論」および「結論」と誤認する可能性が高くなっていると言えよう。

全グループを通じてもb選択者が何人かずつ含まれていたのは、こうした修辭的構造の影響の下に主題を誤認していった結果だと言える。その割合は、被験者全体で約3割、無統制条件の第1グループでも同様な数字を示している。

このように、この文章の場合は、特別な条件を加えなくても、そうした誤認が生じやすいわけであるが、「文章構成を意識させること」は誤認の可能性をさらに強める作用を持ったということができよう。なぜなら、「文章構成の型」や「区切り方」を問われた場合、「序論部分は？」とか「結論部分は？」という意識で文章を見ていくため、他の条件の場合と比べてより一層、最初と最後に置かれた部分への注目度も高まったと考えられるからである。

文章の修辭的構造に起因するこうした誤認は、文章の区切り方にはっきり現れる場合もあるし、そうならない場合もある。第2グループのb選択者で、「結論部分」を第12段落だけに限っていない場合が、それである。こうした場合でも、結論部分の中心を何と見るか、という点では誤認が生じているはずであり、その主な原因は文章の修辭的構造の特徴にあると見て間違いないと思う。

以上、②の「b選択者が多かったのは、なぜか」という視点から考察してきたが、上記のことは①の「文

章構成を意識させることが、適確な主題把握につながらなかったのは、どうしてか]の主な要因の説明にもなっていると思われる。しかし、①の視点から見た場合、もう一つ付け加えておくべきことがある。

この文章の場合、修辭的構造の特徴が文章構成の捉え方を誤らせたり、そのことを通じて主題把握を誤らせたりすることが多かったと見られる。しかしながら、では、相対的に適切な区切り方をした被験者が主題dを選択しているかと言え、そうとも言えない。例えば、序論部分を「1・2」、結論部分を「11・12」とする区切り方をした者は第2グループで3名見られるが、そのうち、2名はa選択者、1名はc選択者となっているのである。

したがって、「文章構成を意識すること」を通じて「適確な主題把握を促す」効果を期待するならば、「単に文章構成を意識させること」だけでは不十分で、同時に、序論部分や結論部分の中心文を探すのに役立つようなストラテジーの行使をすすめることも必要であったと思われる。例えば、主題提示文やディスコースマーカーを意識することなどが考えられよう。。要するに、上記のような効果が得られるためには、「文章構成の把握」と「適確な主題把握」を媒介するような何らかのストラテジーとの併用が必要だということである。

5. B実験の結果の分析と考察

5. 1 メッセージ要約問題の解答分布状況

「この文章で筆者が一番言いたいこと、読者に伝えたいことは何か」という問いへの解答としての要約文には以下のようなものがあつた。

例(要点のみに短縮して示す)

- ・被災者の自律が大切だ。
- ・阪神の被災者は自立的だったが、収容場所のため受け身の被災者になった。
- ・被災者の自立を促すような救援活動を。
- ・被災者が精神的ゆとりを持てるための居住環境作りに努力を。
- ・被災者の精神的な面について心配している。収容場所はプライバシーがなく、落ち着かない。
- ・大きな被害では、冷静な市民でも管理や避難場所が悪いと、やはりできないものだ。

これらの要約文を、主な構成要素または基調が何であるかに着目することによって、以下の4種類に分類した。

要約文の型	特徴
A 型	被災者が自立的であることの大切さを中心内容の1つと捉え、要約文の構成要素にしているもの。
B 型	避難所における居住空間の改善など具体的な提言に限定しているもの。
C 型	被災者の精神状況を重視した救援という視点でまとめているもの。
D 型	その他。(例1.管理や避難施設の悪さ。例2.被災者たちの行動への疑問)

A型の要約文は、表に示した視点から大震災直後の市民の行動への評価を示すとともに救援体制への批判を簡単にまとめているようなものが多い。その意味で、筆者のメッセージを良く理解していることが感じられるものである。これに対して、B型、C型の要約文はある部分、側面だけをクローズアップして取り上げているもので、筆者のメッセージの中心をつかんでいないことが感じられるものである。D型は、さらに原文内容から離れた感じを与えるものである。

この分類基準にしたがってグループ毎の解答状況をまとめてみると、表4ようになる。

表4 メッセージ要約問題の解答分布状況

	A型	B型	C型	D型	計
第1グループ	6	1	0	3	10
第2グループ	5	3	0	0	8
第3グループ	4	4	2	0	10
第4グループ	5	3	2	0	10
被災者全体	20	11	4	3	38

この表の解答分布状況を見ると、以下のような特徴があることがわかる。

1. 被験者全体では、A型の解答が約半数を占めており、最も多い。各グループ内部においてもA型が半数前後の数字を示し、この点ではグループ間の差異はあまり見られない。
2. 第2、第4グループ(文章構成を意識させたグループ)と第1グループを比べると、A型の人数がほとんど変わらないことと、前者の方がB型が多くなっていることが目につく。
3. 第3、第4グループ(筆者の人物像を意識させたグループ)と第1グループを比べると、A型の人数があまり変わらないこと、C型は前者だけに見られること、および、B型も前者のほうが多くなっていることがわかる。

これらの結果にもとづき、以下の3点を考察してみたい。

- ① メッセージ要約の問題で、全グループを通じてA型が多かったのは、どうしてか。
- ② 筆者の人物像を意識させることは、文章理解の結果にどのような影響を与えたか。
- ③ 文章構成を意識させることは、文章理解の結果にどのような影響を与えたか。

5. 2 結果の考察

5. 2. 1 全グループでA型要約文が多かった理由

メッセージ要約の問題で全グループを通じてA型が多かったのは、この文章自体が文章展開や表現のし方から見て、筆者の問題意識や基本視点を鮮明に印象づけるものになっているためだと思われる。まず、文章の前半において、筆者は阪神大震災直後の被災者たちの行動を高く評価することを明確に述べ、

第3段落ではそのことの意義を「被災者が・・・意思を持った個人であることは大変に重要なことである。」と強調している。第4段落では前半の叙述をまとめつつ、「私の期待する災害救援の文化がつけられるのではないかと予感した。だが、被災から時がたち、その印象は変わりつつある。」と後半の内容全体を予告する一文を段落の最後に置いている。

これらの文に表現された筆者の問題意識に注目し、それを念頭において読んでいけば、そのメッセージの中心内容を読み取ることは、そう難しいことではないはずである。実際、全グループを通じて多くの学習者がそのような読み方をしたようであり、そのことはA型が過半数の20人という数字に現れている。

5. 2. 2 「筆者の人物像を意識させる」ことの影響

要約文の解答分布状況では、第3グループは第1グループに比べて、B型、C型が多いという結果が出ていた。また、この条件を共有する第4グループでも同様な傾向が見られた。どうして、こうなったのかを知るために、予備質問への解答などの関連データを見ていくことにする。

第3、第4グループに課した予備質問、「筆者は災害問題のどのような側面に関心を持っているか、想像して書きなさい。」に対する解答結果を見ると、「被災者の精神状況」など、「精神」という言葉の含まれたものが多かった。これに対して、少数ではあるが、「災害救援のし方」など、「救援」という言葉を中心にしたものも見られた。

[注]予備質問のページの著者紹介の文は「野田正彰(のだ・まさあき) 京都造形芸術大学教授・文化精神医学専攻 著書：『災害救援の文化を創る』など多数であり、同ページの記事前文(一部改)には「奥尻、島原などの救援現場を調査し、『災害救援』について研究している野田正彰氏……」という記述があった。

そこで、こうしたキーワードを基準にして解答を分類し、その分布状況を見ると、表5ようになる。

表5 第3、第4グループの予備質問に対する解答種類の分布状況

解答内容の特徴	人数
「精神」をキーワードとするもの	13
「災害救援」をキーワードとするもの	3
その他	2
無回答	2
合計	20

表5に見るように、著者の主な関心は災害問題の精神的側面にあると想像した被験者が圧倒的に多かったのであるが、これは人物紹介の項にある「文化精神医学専攻」という記述に注目したためであると考えられる。このようにして、予備質問の段階では、被験者の多くが、問題の素材となる文章の主題・内容を「災害問題の精神面に関する何か」と予測していたものと思われる。

そうした予測を持った被験者のうち、一部の者は実際に読み始めた段階でこの予測を修正していったようであるが、一部の者はこの予測の影響の下で文章全体を読んでいったようで、そのことは、要約文や読書ノートの書き方にもうかがえるのである。

例1. C型要約文の実例(第3グループの被験者)

筆者が被災者の精神的な面について心配している。収容場所はプライバシーがないし、被災者たちを落ち着かせない所である。だから、収容場所を改善しなければならない。

この被験者は予備質問への解答では「筆者は被災者の精神方面の救援に関心を持っている」と書いている。つまり、その段階で人物像について想像したことと、メッセージの中心内容として受け止めたことは、正確に対応しているわけである。C型要約文を書いた被験者の場合は、すべて、このような形の対応関係が見られる。したがって、「筆者の人物像を意識させることがC型要約文の増加につながった」のは、予備質問への答を考える中で、「筆者の主な関心は、災害問題の精神的面にある」と想像した者が多かったことの影響によるものと考えられる。

他方、第3、第4グループにおけるB型の増加についても、同じ要因が寄与していることが感じられる面がある。

まず、B型要約文の内容についてであるが、これは収容場所の空間面での改善案を取り上げている。文章のパターンとしては、「被災者が精神的ゆとりを持てるための居住環境作りに努力すべきだ」の一文を中心として、これに「せめて一時間は家族だけで集まって話し合える小部屋を作るべきだ」などの文を組み合わせたものが多い。

さらに、もう1つの共通の特徴として、それらの提言はどれも、「被災者の精神的安定の回復のために必要だ」という理由にもとづいているということがある。したがって、B型要約文を書いた被験者は「被災者救援の精神的面で重要なことだから」、ここに注目したという解釈も成り立つし、あるいは単に「実践的提案として重要だから」、これを選んだという解釈も成り立つわけである。

そこで、この点を明らかにするために、第3グループのB型の被験者の書いた読書ノートを検討してみると、ある特徴があることがわかった。それは、B型の被験者4名のうち、2名の読書ノートに「野田氏は……を研究している。」「それで、野田さんは……」などと、ノートの冒頭や、要所に筆者の名前が入った文が置かれていることである。このことは、A型の被験者の読書ノートには全く見られない特徴である。一方、C型の被験者の読書ノートは全員がこれと同じ特徴を示していた。

このことは、筆者の人物像を強く意識した被験者たちの中にB型またはC型の要約文を書いた者が多かったことを示すものである。とすれば、B型の要約文を書いた者のうち、少なくとも一部は、予備質問段階での人物像の想像と内容予測の影響の下に、あの提案部分を重要なものとして選んでいったと推

定できるわけである。

このようなデータの分析にもとづき、「筆者の人物像を意識させること」はこの場合「主な関心は災害問題の精神的な面にある。」という偏った想像を生み出したことを通じて、B型およびC型の増加につながったと考える。そのことは当然の結果として、A型がやや減少するということにもつながったと言える。

このようにして、今回の実験の場合は、きわめて限られた情報にもとづいて「筆者の人物像」を想像させたために、以上のような結果になったが、情報の面で条件を変えていたら、全く違う結果になった可能性もある。つまり、予備質問の段階で筆者の人物像についてもっと内容のある情報が与えられていれば、被験者の想像と予測はより適確なものになり、メッセージ把握にもプラスの効果を持ったという展開が考えられるということである。

5. 2. 3 「文章構成を意識させること」の影響

表4の分析で見たように、第2グループでも、第4グループでも、A型要約文の増加は見られなかった。このことは、この文章の場合、「文章構成を意識させること」は、筆者のメッセージを適確に把握する上でプラスの効果を持たなかったことを意味する。

しかしながら、関連するデータを見ていくと、結果としての「文章構成の捉え方」とメッセージ要約文の型の間には、一つの注目すべき関係があることに気が付く。そこで、ここでは関連データを検討しながら、上記の2つの面を考察していくことにしたい。

まず、第2、第4グループにおける第1問の解答分布状況を見ることにする。

表6 第2グループにおける第1問の解答分布状況

	要約文の型	選択肢	文章の区切り方
被験者1	A	2段	1・2・3/4・5・6・7・8・9・10
被験者2	A	2段	1・2・3・4/5・6・7・8・9・10
被験者3	A	2段	1・2・3・4・5/6・7・8・9・10
被験者4	A	2段	1/2・3/4/5/6/7/8/9・10
被験者5	A	4段	1/2・3・4/5・6・7・8・9/10
被験者6	C	2段	1/2・3・4・5・6・7・8・9・10
被験者7	C	4段	1/2・3・4/5・6・7・8・9/10
被験者8	C	3段	1・2/3・4・5/6・7・8・9・10

表7 第4グループにおける第1問の解答分布状況

	要約文の型	選択肢	文章の区切り方
被験者1	A	2段	1・2・3/4・5・6・7・8・9・10
被験者2	A	3段	1/2/3・4・5・6・7・8・9・10
被験者3	A	3段	1・2/3・4・5・6・7・8・9/10
被験者4	A	3段	1・2/3・4・5・6/7・8/9/10
被験者5	A	4段	1・2/3・4/5・6・7/8・9・10
被験者6	B	4段	1/2・3・4/5・6・7・8・9/10
被験者7	B	4段	1/2・3・4/5・6・7・8・9/10
被験者8	B	4段	1・2/3・4・5/6・7・8・9/10
被験者9	C	4段	1/2・3・4/5/6・7・8・9/10
被験者10	C	3段	1/2・3・4・5・6/7・8・9・10

これらの表を見ると、第2グループでは「2段構成」と答えた者のほとんどがA型の要約文を書いていることが注目される。第4グループでは「2段構成」と答えた人は1名にすぎないが、この被験者もA型の要約文を書いている。では、「2段構成」という見方と、A型のメッセージ把握の間には、何らかの因果関係があるのだろうか。そこで、さらに、第1、第3グループの被験者が書いた読書ノートデータをデータとして見ていくことにする。

第1、第3グループの第2問「読書ノートを書きなさい」では、書き方の条件として「①文章構成がわかるように書くこと」をつけておいた。このため、文章構成がわかるように整理されたものもあったが、箇条書きなど文章構成がわからないものも多かった。それで、集計にあたっては前者を「構成明示」、後者を「構成不明」と分類した。

表8 第1、第3グループの読書ノートの特徴と要約文の型の関係

読 書 ノ ー ト	文書構成の示し方	A型	B型	C型	D型	要 約 文 の 型
	構成明示 前・後半型	6	0	0	0	
	他の型	0	2	0	0	
	構成不明	2	5	2	1	
	合 計	8	7	2	1	

表8でわかるように、構成明示的な読書ノートを書いた被験者のうち、「前・後半型」の構成にした者は全員がA型要約文を書いている。他方、「他の型」の構成にした者や、構成不明の読書ノートを書いた者

の中では、B型要約文を書いた者が多い。このように、明瞭な対応関係が見られるわけである。

この結果は、さきの第2、第4グループの文章構成問題についての集計結果と一致するものであると言える。つまり、2つの集計結果からは、全グループを通じて文章を「2段構成」と扱った者や、「前・後半型」の扱え方をした者は、ほとんど全員がA型要約文を書いているという対応関係が見られるのである。このことは、次のことを意味すると思われる。すなわち、この文章の場合、文章構成の適切な扱え方と、「メッセージの適確な把握」の間には密接な関連が見られるということである。

とすれば、この場合の問題は、「文章構成を意識させること」が、結果の面で「文章構成の適切な扱え方」をする者の増加につながらず、そのため適確なメッセージ把握を促す効果も持たなかったという点にあると言える。したがって、この文章の場合は「文章構成を意識すること」の他に、文章構成を適切に扱えるのに役立つような他の読解ストラテジーとの併用が必要だったと考えられるのである。

6. まとめ

今回の実験の主な結果を要約すると、以下のようになる。

- 1) A実験において、「文章の社会的目的を意識」させたことは、多くの学習者に対して文章の主題を適確に扱えさせる上でプラスの効果を持った。
- 2) B実験において、「筆者の人物像を意識」させたことは、被験者の読み方に一定の影響を与えたが、この場合はメッセージの適確な把握を促す効果を持たなかった。
- 3) A、B実験において、「文章構成を意識」させたことは、この場合、いずれも、適確な主題把握やメッセージ把握を促す効果を持たなかった。

また、以上の項目に関連するデータを分析、考察する中で見えてきた事柄を要約しておく、次のようになる。

- 4) 「筆者の人物像を意識させる」ことによって適確なメッセージ把握とか、深い文章理解を促すためには、表面的な人物紹介によって、想像させるだけでは不十分である。筆者の問題意識や、執筆の目的を適確に把握することに役立つような情報の提供を併せて行う必要がある。
- 5) 「文章構成を意識させる」ことによって適確な主題把握やメッセージ把握を促す効果を得るためにも、単に意識させることだけでは不十分で、他の読解ストラテジーとの組み合わせが必要である。そのストラテジーは、1つは文章構成を適切に扱えるのに役立つようなもの(例えば、ディスコース・マーカーへの注目)であり、もう1つは、文章構成の把握と適確な主題把握を媒介するような役割を果たすもの(例えば、主題提示文を探すこと)である。

注

- (1) 市川孝(1978) 参照
- (2) 「読書ノート」とは、ここでは「文章を読みながら、各部分の要点をメモしていくことによって作成される読解の記録」のこと。小宮(1993) 参照。

参考文献

1. 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
2. 岡崎敏雄・中篠和光 (1989) 「文章理解過程の研究に基づく読解指導」『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』広島大学教育学部留学生日本語・日本語教育学科
3. 岡崎敏雄・長友和彦 (1989) 「スキルシラバスによる読解指導」『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』広島大学教育学部留学生日本語・日本語教育学科
4. 小川貴士 (1991) 「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75
5. 加納千恵子 (1993) 「科学技術日本語の読解に関する一考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8: 133-152
6. 小宮修太郎 (1993) 「読書ノートに見る文章理解の差異について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8: 101-130
7. 佐久間まゆみ (1985) 「文章理解の方法とー読解と要約ー」林四郎編『応用言語学講座第1巻』明治書院
8. ————— (1987) 「論説文の文章・文段構造と要約文の類型について」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』2: 1-30
9. 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編 (1992) 『学習者中心の英語読解指導』大修館書店
10. 天満美智子 (1989) 『英語読解のストラテジー』大修館書店
11. 西田 正 (1989) 「文章構成の理解とスキーマ」『英語教育』大修館書店
12. 山元啓史 (1992) 「日本語科学技術文献読解のための読解ストラテジーに関する研究」鳴門教育大学大学院教育研究科 修士論文
13. Carrel, P., Devine, J., and Eskey, D. (eds.) (1988) *Interactive Approaches to Second Language Reading*, Cambridge University Press